

昔むかし、オーヴェルニュ人の七人兄弟がいました。

ある晩、兄弟そろって散歩に出かけました。井戸のそばを通り過ぎてから、みんなは、だれも井戸に落ちなかったかどうか、確かめなくちゃと思いました。そこで、立ちどまって、たがいの数を数えました。すると、六人しかいません。自分を数えわすれていたからです。

みんなは、代わる代わる井戸をのぞいてみました。水に自分の顔がうつっていました。みんなは、落ちたやつを見つけたと思いました。

そこで、みんなでくさりになってつながって、助けることにしました。ひとりが、井戸の上の横木につかまりました。残りの兄弟が、次つぎに足にぶらさがりました。まもなく、横木につかまっていたやつが、重さにたえられなくなってさけびました。

「手がすべって、もうだめだ」

すると、一番下にぶらさがっていたやつがさけびました。

「両手につばをつけるといい」

横木につかまっていたやつは、その通りにしました。そして、みんな井戸に落っこちてしまいました。

わたしも近くにいたんだけど、いっしょに落ちたらいへんだから、大急ぎで逃げて来たんですよ。

草が深くて ねずみの足をふんだぞ

キュイ、キュイ、それでその話はおしまい

村上郁再話